

令和6年度 第1回学校運営協議会 会議録

日時 令和6年6月21日（金） 15:30～16:45

場所 会議室

出席者 委員：鈴木、小市、新庄、小倉、酒井、新倉

職員：校長、副校長、教頭、内野（斎藤 代理）、石川、渡辺、岩崎、宮崎、村山

次第

- 1 校長あいさつ
- 2 学校運営協議会委員名簿の確認
- 3 学校運営協議会要綱等の確認
- 4 運営協議会の会長及び副会長選出
- 5 令和5年度活動報告について
- 6 令和6年度の主な活動予定及び検討課題等について
- 7 各分科会別打合せ
- 8 その他

会議内容

■校長より

- ・今年度は4年間の目標作成の年である。現在の生徒の状況を踏まえて策定した。

■令和5年度 学校評価報告書について

〈生活保健グループ〉

- ・指導案件について、時代に対応して指導の内容が変わってきている。SNS 上での問題など、案件が複雑になっている。指導側も意識改革をしていく必要がある。
- ・サポートドッグで生徒の状況や環境を把握しているが、把握しすぎることもある。バランスを考えるなど改善の余地がある。

〈学校管理グループ〉

- ・昨今の災害が多い状況において、校内での避難訓練も実のあるものにしていく必要がある。防災についての意識を高めていきたい。
- ・災害図上訓練「DIG」の実施が必須であり、グループで準備していく。

〈キャリアグループ〉

- ・本校、勉強会に対しての意欲はあり、学習はできるが自己肯定感が低い生徒が多い。サポ

ートドックに関してもネガティブな回答が多く見られる。

・キャリア教育は実績も重要だが総合的に学校生活の充実を目指すことを目標にした。自ら目標を立ててそれに向かっていくことを目指す。

〈生徒会グループ〉

- ・一年間のテーマは「協同する」。生徒が主体となって動けるよう教員がサポートをしていく。
- ・体育祭の反省を活かし文化祭準備をしていく。昨年度までは文化祭は教員主体であったが今年度からは生徒も積極的に運営に関わっていく。
- ・コロナをきっかけに中断している行事について再検討し、実施や廃止を決めていく。

〈広報渉外グループ〉

- ・広報活動によって近年は受験生を増加させることができている。今年度の広報活動ではスライドや動画の上映を予定している。全公立展では無事実施ができた。
- ・本校の明るくきれいな校舎、真面目な生徒を見てほしいという思いがある。施設面での入学、ついで行事が入学の理由として多くなっている。
- ・PTA 総会は書面での決議を実施。試行錯誤しているが来年度以降も同様の形で実施予定。

〈カリキュラムグループ〉

- ・各年度、授業評価などのアンケート実施。深い学びに向かったの状況把握とその改善に努める。
- ・教科横断型の授業に努めていく。研究授業での授業力の向上を図る。
- ・外部講師を招いてのアクティブラーニング、探究型の授業の知識を得ることを検討中。

■意見交換

「近年の生徒に見られるメンタルの弱さの原因（大学生以上にも見られる）は何だと捉えているか。」（委員）

「1年生については特に人間関係での問題が多く見られる。学年が上がっていくにつれ家庭や進路での悩みも加わる。引き続きサポートドックを活用し状況把握に努めていく。」（学校）

「SNSの影響もあるのではないか。」（委員）

「あると考えている。注意深く見ていく。」（学校）

「教科横断型（クリル）授業や発展的な他教科との協同での授業の実施は現在どのような状況か。」（委員）

「発展的なものは現在できていない。校内での研修などで授業力向上をしていく。」（学校）

「総合型選抜の受験者が爆発的に増えている。推薦での受験者確保を大学側も目指している。私立の大学の中では推薦を公表せず希望者に開示するところもあると聞く。またそのような状況に合わせて他校では担任が3人いる(勉強、進路、メンタルで分担)高校もある。」(委員)

「教員の働き方改革は必要。授業は削れないため行事が削られる事例が見られる。ただそうした場合、行事を通しての経験による学びが少なくなるという問題がある。行事自体を減らすのではなく、外部の業者を参加させ教員の負担を減らすことも良いのではないか。」(委員)
「傷つきやすい子=ここまでの教育がうまく行っているのではないか。我慢をしなくていい、与えられることが一般化していることが問題であり、経験と失敗をさせることが重要だと考える。」(委員)

「子供サポートドックは県立高校で必須実施であるとともに、横浜のスタディナビでは生活に関するアンケートが実施できるようになった。そこでは子どものネガティブな記述も見られるが、小学生の時からこれらの物に触れた世代が高校に進んだ際、サポートドックでの訴えは増え支援がしやすくなるのではないか。」(委員)

「傷つきやすいというのは、みんなと仲良くしなければいけないという教育、時代のせいでもあるのではないか。」(委員)

「校種をまたいでの連携がこれから重要である。本校の挨拶運動は実施している小学校で良い効果が出ている。」(委員)

「小学校でも傷つきやすい、失敗ができないといった雰囲気がある。」(委員)

「小学校低学年でも ICT を有効に使っている状況である。」(委員)

「本校の課題は主体性、自己肯定感の向上である。以前からの課題であるため今年度赴任した先生含め克服して行ってほしい。」(委員)

「体育祭などの行事の保護者の参観(3年生だけでも)を希望する。」(委員)

「なんとか模索していく方向で動いていく。」(学校)

「ネット上での生徒の書き込みはリアルタイムで把握することは難しい。また毎日こまめにチェックすることも難しい。」(学校)

「この例のように ICT やインターネットの普及は教員の働き方改革と矛盾するところもあるのではないか。」(委員)

「AI の導入で英語の授業の内容が変化するのは、翻訳や AI の使い方の授業になるのでは

ないか。いずれ英語の授業が減っていく可能性もある。技術の普及と教育の関係は今後も注意深く見ていく必要がある。」(委員)

「チャットGPTといったAIなどの新しい技術を教育現場で有効活用していくことが今後増えていくのではないか。」(学校)